

わたしはアイス

豊川小・5 行本 風

お父さんはわたしをつかんだ

「いやだいやだ」

「絶対にいやだ」

次女に食べられるのを夢見ていたのに

そのとき

次女がやってきた

わたしのことを自分のだと言う

うれしかった

次女がわたしを手を取った

やっとな食べられる

太陽のようなかわいい笑顔

次女はアイスが大好き
おいしそうに食べてくれる

わたしはアイス

夜になった

次女が手をのばす

選ばれたのはとなりのアイス

悲しい

まるでかみなりが落ちたように悲しい

なぜ選ばれなかったんだ

そのとき

冷とう庫が開いた

そこにはこの家のお父さん

なあんだ残念